HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国語臨海方言の記述的研究 : ヴォイス・アスペクト体系を中心に [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	根岸, 美聡
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第13389号
Issue Date	2018-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/72632
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Misato_Negishi_abstract.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：根岸美聡

学位論文題名

中国語臨海方言の記述的研究
――ヴォイス・アスペクト体系を中心に

本論文は、中国浙江省の中部に位置する臨海市で用いられている中国語方言の一つである臨海方言を研究対象とし、音韻体系・文法体系の概略を記述した上で、文法体系におけるヴォイス表現・アスペクト表現に焦点をあて、ヴォイス・アスペクトに関わる各言語形式の意味機能・生起条件の分析を試みたものである。

第一章では、まず中国語方言の概略とその中での臨海方言の位置づけを確認し、中国語方言研究史の概略を紹介し、さらに中国語方言研究および臨海方言研究の現状とその問題点、本論文の意義・具体的な研究方法について述べている。そのなかで、臨海方言の先行研究には音韻体系を記述したものは存在するが、文法を体系的に記述した研究は存在しないことを紹介した。

第二章では、臨海方言の音韻体系の概説を行っている。まず主要な先行研究である黄晓东(2007)の提示した音韻体系の信頼性を、約 3000 字の漢字音についての包括的な調査によって確認した上で、声調の調値について修正すべき点を指摘した。さらに黄晓东(2007)が本格的には検討していなかった臨海方言の連読変調、すなわち音節固有の声調が前後の音節との関係により規則的に変化する現象について、それが生起するパターンと生起条件とを中古音（隋代音）の音韻体系の枠組みを参照しながら検討し、その体系を明らかにし、臨海方言の連読変調が、南部呉方言・閩方言などにみられる、岩田(1994)の言う「最終音節優勢型」（最終音節の声調だけが保たれて先行音節が中和されるか声調交替を起こすタイプ）に属するものであることを指摘した。なお、本論文で示した連読変調の体系は、先行研究たる张燕春(2006)の分析結果とは大きく異なるものである。

第三章では、臨海方言の文法体系の概説を行っている。統語構造、品詞体系と主要な品詞の内実、各種の文法機能を表す機能語の一覧、主要な構文のリストといった言語事実を体系的に提示した。そのなかで、刘丹青(2003)が、呉方言の特徴として指摘した、被動作者が主語と述語動詞との間に副主題として生起する現象が、臨海方言においても存在することを確認した。

第四章では、ヴォイス範疇が臨海方言においてどのように体系化されているかを論じ、「使役構文」「処置構文」「受動構文」に相当する各種構文について、それを構成する介詞の種類、構文の生起条件について検討を行っている。その中で、受動構文が“□ɕɛ[21]”と“让”という異なる介詞によって構成されることがあり、両者では生起条件に違いが見られること、さらに“拨”から構成される処置構文は、一定の条件下では述語動詞が可能補語を伴っていても文が成立するなど、標準中国語における処置構文（“把”構文）とは生起条件が異なることなどを指摘した。さらに、使役構文の動作者を導く機能と処置構文の処置対象を導く機能を兼ねた備えた介詞“拨”の存在に着目し、その多機能性の内実を分析した上で、“拨”が通時的に如何なる過程を経て各機能を備えるようになったのかという、意味拡張のプロセスを推定した。

第五章では、アスペクト範疇が、臨海方言においてどのように体系化されているかを論じ、「将然」「開始」「起動」「持続」「進行」「継続」「実現」「経験」「終結」「出来事の発生」といった各種のアスペクトがどのような助詞、副詞等によって表現されるのかを示している。そして多くのアスペクトは標準中国語と同源の形態素によって担われているものの、「開始」を表す“□kʰœ[24]想”のように形式と機能面で独自性の強い表現形式もあることを指摘した。さらに、「実現相」を表す形式に“□lɜʔ[0]”、“爻”という二形式があることに着目し、それらの機能差異を分析した結果、前者は動態的事態のもたらした結果状態や何らかの影響が参照時に残存している〈実現・残存〉を表すものであるのに対して、後者は単に〈実現〉を表すものであり、動態的事態の結果状態や影響には非関与的であると主張した。このことは、臨海方言においては、「結果状態・影響の残存」という意味特徴がアスペクト表現形式の使い分けに関与している可能性があることを意味する。

「付録１」は「臨海方言同音字表」であり、臨海方言における約 3000 字の漢字の音（「字音」）を一覧表にしたものである。これは、共時的な音韻体系および中古音（隋代音）との通時的な対応関係を論ずる基礎資料となるものであり、第二章で論じた内容は主にこれに基づく。臨海方言の字音については黄晓东(2007)が既に自身の調査結果を公表しており、本論文の調査結果も黄氏のそれと大きく異なるものではないが、黄氏の調査結果の信頼性を確認した上で、補足・修正を行った。

「付録２」は、「臨海方言文法調査データ」であり、『中国语言资源调查手册』(pp. 169-176)記載の 50 の例文に対応する臨海方言の例文を例示したものである。これらの例文から得られた言語事実は、本論文の第三章の文法概説において整理されている。

本論文の主要な研究成果は、第一には、今まで体系的な文法記述がされたことのなかった臨海方言について、その統語構造および主要な機能語の体系を提示したことである。第二には、音韻体系について、先行研究とは大きく異なる連読声調の体系を提示したこと、さらにそれが南部呉方言、閩方言などにみられる「最終音節優勢型」に属することを指摘したことである。そして第三には、アスペクト・ヴォイスという重要な文法範疇の臨海方言における体系化のされ方を、具体的に明らかにしたことである。